

図書館通信

101

1992.10

「遊民」として読むこと

石 井 潔

ベンヤミンによれば、19世紀のパリには当時できたばかりの商店街(passage)や百貨店をただ目的もなくぶらぶら歩きする「遊民」(flâneur)と呼ばれる人々が登場した(『ボードレール』晶文社)。1867年のパリ万博に象徴される膨大な商品の山のなかをさまよう彼らは自らもまた一個の商品として市場で売り買いされる運命にある。彼らは例えばボードレールのようなパトロンなき詩人であり、あるいは街角で人を待つ売春婦である。しかし買い手を持つ商品として振る舞うことは決して彼らの最終目的ではない。彼らはぶらぶら歩きするために、ただそのような自由を確保するためにのみ自らを売る。彼らは常に単なる商品以上の存在であろうとする「気概」をもって生きている(「気概」については、フクヤマ『歴史の終わり』三笠書房参照)。従って彼らは単なる群衆ではない。群衆は足早に仕事場へあるいは取引先へ、要するに定められた目的地へと急ぐだけである。「遊民」たちのぶらぶら歩きにはそのような目的はない。馬車に乗って先を急ぐ群衆に対抗して亀を連れて散策することが「遊民」たちの間で流行したというエピソードは両者の決定的な相違をよく表している。

しかしもう一方で確認しておかなければならないのは、「遊民」たちが商品をそして商品としての自分自身を売り買いすることを決して恥じているわけではないということである。ボードレールはワーズワースのように文芸市場で売り買いされることが詩にとっての墮落だなどと嘆きはしない。また売春婦たちも性の売り買いによって自らが汚されたとは思っていない(橋爪「売春のどこが悪い」『フェミニズムの主張』勁草書房所収参照)。芸術や性がかつて持っていた神秘性やアウラを、言い換えれば「礼拝的価値」を失うことを「遊民」たちは残念だとは思わない(ベンヤミン『複製技術時代の芸術』晶文社)。さらに一般的に言えば、共同体の神話や文化的伝統といった「物語」のなかに我々の生きる意味を見つけることはもはや不可能であり、日々の出来事は神秘的意味を失った「情報」として例えば我々がニューススタンドで買う新聞の記事という形をとって与えられるしかないという新たな事態を彼らは甘んじて受け入れる。しかしここでもまた「遊民」たちにとっての「情報」は何らかの定められた目的との関係を欠いている。大学に合格するための「情報」、株で儲けるための「情報」といったものには彼らは縁がない。「情報」の洪水は彼らにとっては役に立つ「情報」を血眼になって探す場所ではなく、亀を

連れて散歩する自由を楽しむ場所なのだ。

「遊民」として読むことは文章のなかに崇め奉るべき「物語」を求めて読むことでもなければ、手近な目的を実現する為の単なる「情報」を求めて読むことでもない。膨大な本や雑誌の山のなかをとくに目的を定めることなく散歩することを通じて自分なりの新たな「物語」を紡ぎ出していくことだけが「遊民」としての読書のあり方である。内田義彦がドイツ語に即して正しく指摘しているように「散歩する」(spazieren)という動詞は通常は「～へ」(zu)という前置詞と共に用いられることはない。仮にそのような散歩が結果として例えば学問というような目的地に到達することがあったとしても(『学問への散歩』岩波書店)。(教育学部・倫理学)

カレントコンテンツを使ってみて

大学院理学研究科地球科学専攻2年 田 邊 裕 高

私がカレントコンテンツを初めて見たのは5月か6月だったと思います。ある日、図書委員の教官が「図書館におもしろいものが入ったらしい。最新のアブストラクトが手に入るシステムだそうだ。一緒に見に行く？」と言われました。そこで私は二つ返事でついていきました。図書館では職員の方々が「新しいシステムなので皆さんに宣伝してくださいね。」と言われたので、学生でこのシステムを使うのは私が何人目なんだろうと思ったことを覚えています。

このシステムの大きな利点は、何と言っても最新のアブストラクトが読めることです。さらに、毎週送られてくるデータベースから様々なレベル、例えば雑誌、キーワード、著者名などでの検索によって絞り込めること、さらに無料であることなどが利点として上げられると思います。

カレントコンテンツを利用すると、静岡大学では入手できない雑誌のアブストラクトがすぐに、もしかすると国内にその雑誌が到着する前に読めるので、本当に読みたい論文なのか、そうでないものなのかが分かりやすい。そして論文名だけを読んで他大学に論文のコピーを依頼するよりも確実に必要な論文が入手できると思います。このシステムがあるコンピューターの横には、ある雑誌が、どの大学に保管されているかを検索できるシステムがあるので、この2つのシステムを利用すれば、スムーズに必要な論文を入手できます。さらに、このシステムには著者の連絡先まで記載されているので、著者への論文の別刷りの請求や、それ以外の連絡も可能と言うことになると思います。

このシステムでは様々な検索によって論文が選び出せるので、必要な論文を素早く見付けることができます。例えば、1週間に1度図書館へ行き、あるテーマ、例えば、雑誌、キーワードごとにフロッピーディスクに保存して研究室に持ち帰れば、いつでも研究室で、関連分野の最新のアブストラクトが読めるようになります。このシステムのセーブ形式はMS-DOSのテキスト形式でもできるので、最近はやりのマッキントッシュでも読むことができます。

このシステムの不便な点の1つに、1週間ごとのデータが独立しているので、例えば過

去一か月間のある雑誌にのった論文のアブストラクトが読みたい場合に、4回データベースにアクセスしなければならないという事が上げられると思います。しかし、これはあくまで最新のアブストラクトを読むためのシステムなので、仕方の無いことなのかも知れません。さらに贅沢を言えば、テキスト形式で保存した場合に、他の場所では検索できないので（他のソフトを使って検索可能な保存形式もあるらしい）、学内のネットワークを整備して、それを使ってどこからでも（せめて学科に1ヶ所）検索可能になれば素晴らしいと思います。

現在できる改善点としては図書館のコンピューターの横に簡易マニュアルを置いていただきたいと思います。そうすれば、もっと皆さんが利用しやすくなるのではないかと思います。

最後に、このカレントコンテンツは、まだまだ私の知らない機能がたくさんあると思いますので、皆さんも図書館に出かけて、職員の方にいろいろ聞いてみて下さい。きっと便利なシステムだということが分かります。そして、新しい利用法を見つけられたら、図書館通信で皆さんに教えてあげてください。



バージョンアップのお知らせ

◆ カレントコンテンツの検索ソフトが、10月からバージョンアップし、要望の高かった以下の3点についての改善がなされました。

- ① 1号ごとの検索のみから、マルチ検索も可能となり、6号分=6週間分までを同時に検索できるようになった。
- ② 検索画面上の表示とメッセージが、これまでより豊富で分かりやすくなり、改良された。
- ③ 検索語が、検索結果一覧においてハイライトで表示され、見やすくなった。

◇ カレントコンテンツ・データベースの掲載誌リストも届きました。併せてご利用下さい。

◇ マニュアルについては、現在の「使用説明書」に追加機能=マルチ検索の説明を加えた「改訂版」と「簡略版」の両方を作成中です。

学生諸君に一読を勧めたいこの一冊

坂 田 完 三

■ 深海 浩著 「生物たちの不思議な物語（化学生態学外論）」 化学同人

※ 学生用図書で選定済／4 6 8に分類の予定

ゴキブリが実験室の片隅に現われると、この世にこれ以上恐ろしいものはないかと思うほどの大騒ぎをする学生君たちを尻目に、ベンゼンを一滴かけて瞬時に冥土に送ってやる。その後ひとしきりこの虫の艶やかな羽の色を褒め、この虫がいつもあの長い触角を丁寧に手入れするきれい好きな昆虫であることを話すのであるが、学生君たちは全く聞く耳をもたずというところである。衛生害虫ということで全く無視されるゴキブリがかわいそうになる。

ここ数年来バイオテクノロジーが脚光をあび、猫も杓子もバイオ、バイオと大騒ぎし、また、近頃は自然だ、環境保全だにぎやかなことである。農学部に入學してくる学生諸君にもこのような背景から進學を決めたものが相当いるものと思われるが、この自然界に生息する多種多様な生物が繰り広げる不思議なドラマに、一体どれだけの人達が目を向けているだろうか？「天然だ。自然だ。」という前に、地球上に生命が誕生して以来繰り広げられてきた、色々の生物達が織りなすドラマにもっともっと目を向けて欲しい。農学部の学生諸君ですらあまりにも生物の生き様に無関心なことに危機感すら抱いていた矢先、すばらしい本が出されたので、ここに紹介する。

昆虫はこの地球上でもっとも繁栄し、最も種の多い生物といわれている。本書では、この虫達が主人公である。そのタイトル通り、ゴキブリやアゲハチョウなどの虫達が種の保存のために繰り広げる一見不思議なドラマが、生物の永い共進化の過程のひとつコマであり、それらの多くが実は「化学の言葉」で語られているのだということが、軽妙洒脱な語り口で、実に見事な構成のもとにやさしくまとめられている。副題の「化学生態学外論」（その由来はあとがきに解説されている）からも、単なる解説書ではないと誰もが感じることと思うが、ここにも著者のこの一冊への思い入れが現われている。

モンシロチョウがキャベツ畑や菜の花畑の上を飛び交う様も最近では目にすることも難しくなってしまった。それでもほとんどの学生諸君はモンシロチョウはキャベツなどの十字花植物に卵を生み付けることは、アゲハチョウはみかんのどの柑橘類がなければ繁殖できないことと同様に良く知っていることである。しかしながら、では何故そうなのかという問いに答えられる人は数少ないと思う。そんな問いに易しく答えてくれるのが本書である。

ファーブルは昆虫の行動を詳細に観察し、昆虫の世界のすばらしいドラマを「昆虫記」

として世に残した。その虫たちが繰り広げる不思議な行動が、化学物質による情報の伝達で見事に制御されていることが、近年次々と明らかにされてきた。言葉をもたない生物達が「化学物質」という言葉で情報を伝えあっていることを知れば、道端で見かける草花や虫たちに対する考え方も変わってくるのではないだろうか？

とくに、生物にとっては次の世代を残す生殖行動は重要な行動の一つであり、全ての生物の本能はこの一点に収束しているといっても過言ではない。より優れた子孫を残すため、各生物はそれぞれ進化の過程であらゆる手段を利用してきた。言葉をもたない虫たちは性フェロモンと呼ばれる化学物質を言葉として愛を語っているのである。「化学物質」を手掛かりにして、生物の行動を観察して行くと、彼らが示す一見不可解な行動が次々と明らかにされて行く。

アゲハチョウは産卵に訪れたみかんの葉を必ず前脚で激しく叩く。実はこの動作により、みかんの葉に含まれる化学成分を調べ、間違いなく目的の植物であることを確かめているのである。このことが見事な実験で明らかにされて行く様子が生き生きと紹介されている。

また、我々人類はまるで全生物の頂点に立ったかのごとく毎日を過ごし、自分が他の生物の生存のための餌になるなどとは、夢にも考えたことがない。しかし、そんな生物達にとっては、これだけ多くの生物が生きる環境の中で自分の身を守り、生き残ることは大変なことである。何らかの方策で身を守らねばならないのである。そのような目的にも化学物質は利用されている。カラフルに化粧したヒョウモンエダシャクやオオカバマダラなどの蝶が鳥たちに捕食されない理由が、彼らが餌とする植物から集めて体内に蓄積した毒物質によること、そしてこのようにして目立つことで鳥たちの学習効果を高めることになり、結果として種の保存がより効果的となることを知り、永い進化の過程で作り上げられたカラクリに触れて、驚く人もいるのではないだろうか？

さらに、カブラハバチのようにいつもはかぶらを常食としているが、成虫となると他の昆虫がほとんど食べないクサギという植物を訪れ、葉の裏面に分泌される物質を舐めるといふ不可解な行動をする。彼らはこの物質を体表に分泌することが確認された。もちろん化学分析によってではあるが、この過程でこの研究者はなんとこの虫を舐めてみて大変苦いことから、このことを推測するのである。ここまでくると脱帽である。まだこの奇妙な行動の本当の理由はわかっていないようであるが、クサギを与えずに系代飼育しているとだんだん繁殖力が衰えてくるという観察がなされている。まるで我々人間が体調が思わしくなくなったとき、今はやりの強壮剤ドリンクを求めて薬屋へ行くようなものではないかと推定されている。何とも楽しくなってくる話である。

これらは心底虫の好きな研究者の緻密な行動観察があって初めて成し遂げられた研究成果である。「なぜだろう？」この単純な疑問を発し、それを明らかにしようとするところこそ学問の原点である。まだまだ自然は解からないことばかりである。本には分かったことだけが書かれているだけである。こんなロマンを求める研究の積み重ねが、この自然の生態系の成り立ちを少しずつ明らかにして行くのである。自然を相手に研究を進める理科系の学生諸君にはもちろんのこと、文科系の学生諸君にも一読を勧めたい。化学を知らないからと毛嫌いすることは毛頭ない。化学物質は言葉を持たない生物達にとっての言葉なのである。化学構造の違いは、言葉による表現の違いと同じことである。コミュニケーションのための記号にすぎない。そのように考えればなんの抵抗もなく読み進め、一度本書を手にした読者は、きっと一気に読み終えること請け合いである。

(農学部・附属魚類餌料実験実習施設長)

偽の科学論文にご用心！

浜松分館 江口 敏一

最近、科学研究における不正行為（データの捏造など）が話題になっていますが、この不正行為に対してわれわれはどのように対処したらよいのでしょうか。そこでここでは不正行為の生まれてきた背景を見ながらそのことについて述べたいと思います。

さて、研究成果を発表する主要な手段の一つである雑誌が世界で最初に誕生したのは今から約300年前の1665年のことです。その最初の雑誌というのはフランスの *Journal de savans* とイギリスの *Philosophical transactions* の2つです。それ以前までは科学者は他の科学者たちと口頭や手紙などで研究成果のやりとりをしていました。しかし、それもある規模以上の情報伝達するには難しくなってきたため、そこでより多くの人々により多くの情報を伝えるために雑誌が誕生しました。さらに雑誌は情報伝達の手段というだけでなく、研究成果の公式な記録物であり、また後で述べる先取権を確証するための手段でもあります。

PRICE 1) の調査によると雑誌の数は指数関数的（15年で倍）に増加しています。この増大する文献情報に対して科学者が雑誌論文を読む時間や量には限界があり、すべての雑誌論文に目を通すことは不可能となりました。そこで必要な論文だけを探すことができる手段である索引誌や抄録誌のような二次資料が誕生しました。この二次資料の情報量も増加してきて発行が遅れてきたために、コンピュータにより編集作成するようになり、またその副産物として現在では文献検索の主要な手段の一つであるデータベースが誕生しました。

このように指数的に成長し続ける科学社会において科学者が成功するにはどうしたらよいのでしょうか。科学社会において科学的な業績（成功）を得るには、一番最初に自分の研究成果を認めてもらうことが必要となります。そこでこの先取権(Priority)を獲得するために科学者は PUBLISH OR PERISH と言われるような他の科学者よりもいち早く研究論文を発表する競争をし続けなくてはならなくなりました。

この一番のりをめざした激しい競争は、結果を急ぐあまり、研究論文に、不注意などから生じる“誤り”や、自分の仮説に合わせるために意図的に実験データを捏造する“データの捏造”、他の研究者の研究を引用せずに利用する“剽窃”などの不正行為を一部の人に起こさせてしまいました。このような誤りや不正行為のある論文はそれ自身が誤りであるだけでなくそれを引用した他の論文の質まで落としてしまいますし、最悪の場合には社会に対して悪影響を及ぼしてしまいます。

科学にはこのような不正行為を防ぐ機能はないのでしょうか。科学には研究成果をチェックする機能として、審査制度、追試制度などがあります。審査（レフェリー）制度とは、科学的な質を高く維持するために、雑誌に投稿された論文をその分野の専門家であるレフェリーが審査するものです。追試制度とは、他の科学者によって実験を再現して検証するものです。しかしながら実際には論文の偽造を発見したり、他人の実験をわざわざ正確に再現して検証したりすることは難しく、それらの制度の網をかいくぐってしまうものがあります。

誤りや不正行為のある論文が発見されたならばそのことをただちに知らせる必要があります

ます。その例として、雑誌では誤りの修正や撤回の記事が載ります。また二次資料やデータベースでは、例えば医学分野の代表的な二次資料である Index Medicus とそのデータベースである MEDLINE では Retraction of publication というキーワードが誕生し、撤回の記事を探すことができるようになりました。

しかしながら、修正や撤回の記事に常に気を付けていることは難しいのが現実です。そこで自分の論文の質を落とさないためにも少なくとも自分の論文に引用する文献に修正や撤回がないかどうかだけでも注意する必要があると思います。

引用文献：

- 1) D. プライス. リトル・サイエンス、ビッグ・サイエンス. 東京, 創元社, 1970, p. 12-17.

寄贈コレクション紹介

今回は、静岡大学附属図書館所蔵のコレクションの中から、寄贈によるコレクション（文庫）のいくつかを紹介する。

《河井文庫》

明治・大正期の新聞コレクション。静岡県明治・大正を知るには絶好の資料である。この新聞コレクションは、1957年（昭和32年）に掛川市の元参議院議長故河井弥八氏より当館に寄贈された。コレクションの内容については、自由民権期では、「静岡新聞」「静岡大務新聞」が断片的に収蔵されている外、東京の「朝野新聞」がかなりある。明治後期の「静岡新報」、明治後期から大正末期までの「静岡民友新聞」が河井文庫の圧巻である。さらに同じ時期の「報知新聞」「東京朝日新聞」「万朝報」「東京日々新聞」等があり、静岡版を有している。「静岡民友新聞」と「静岡新報」は保存と閲覧のためにマイクロフィルムが作成されている。冊子体の「河井家寄贈新聞目録」（1975）が作成されている。

《宇山文庫》

本学元教育学部教授、故宇山直亮氏の旧蔵書。洋書779冊、和書262冊、雑誌2誌から成る。宇山教授の専門が英米文学であったことから、蔵書の大半は英米文学書であるが、それらに混って大小さまざまな辞書・事典類や英米語法書・文法書が多い。蔵書中には、スペンサー、エリザベス朝演劇、スターン、カーライル、ハックスリー、20世紀アメリカ文学の作品や研究書が多く見られる。冊子体の「宇山文庫目録」（1977）が作成されている。（「図書館通信」No.39に紹介記事あり）

《明治期刊行法律書コレクション》

1985年（昭和60年）に静岡地方裁判所掛川支部より寄贈された明治期刊行の法律書、605冊のコレクション。日本における近代法の形成・発展の足跡を知る上で貴重な文献

資料である。これらの図書は現在入手はなかなか困難であり、所蔵している図書館も少ない。「国立国会図書館所蔵明治期刊行図書目録」の記録にない図書も多く含まれている。コレクション中の文献は、時代的には明治時代全期に及んでおり、日本近代法体制の形成過程を全面的にカバーしている。明治10年代の旺盛な立法活動の足跡を示す文献（草案類・註釈書・外国法の翻訳書など）が多いのが特色である。また法分野の範囲もほぼ全法領域にわたっている。法規集・判決録、「全国民事慣例類集」、司法省法学校のエデュケーション・講義内容を示す文献、実務向けの法令の解説書、等の文献を含んでいる。冊子体の「静岡地方裁判所掛川支部寄贈図書目録」（1986）が作成されている。（「図書館通信」No. 78に紹介記事あり）

《小此本文庫》

本学名誉教授、小此木真三郎氏寄贈の蔵書であり、洋書548冊、和書233冊から成る。小此木教授は、静岡大学文理学部時代から人文学部時代にかけて23年間在職された。政治史、国際政治を専攻され、講義や演習では、政治史や国際政治に加えて、ときには社会科学概論や労働運動史を担当された。当コレクションは、小此木教授が自ら愛蔵されてきた図書文献の約2分の1に相当するものである。冊子体の「小此本文庫目録」(1987)が作成されている。

《黒羽文庫》

本学教育学部教授であった故黒羽清隆氏の蔵書のなかから、御遺族により寄贈された図書、3079冊が当文庫である。氏は1979年に静岡大学に赴任し、8年余日本史（現代史）を講じられたが、1987年急逝された。当文庫の内容は、主に日本近代史関係の図書であり、軍事史、昭和史などを中心に、基本資料はもとよりさまざまな階層の人々の伝記・自伝・日記類を含み、学術的に貴重な価値をもっている。冊子体の「黒羽文庫目録」（1990）が作成されている。

以上掲げたもののほかに、大場秋雄氏寄贈《エスプラント関係資料》、花岡俊輔氏旧蔵書《花岡文庫》、坂藤英隆氏寄贈《中国語刊中国文学図書》のコレクションがある。それぞれ冊子体目録が作成されているので、内容に興味をお持ちの方は目録を参照願いたい。

